

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 安達大輔

安達大輔氏の論文「痕跡を生き直す：ゴーゴリの記号システムにおける反省の諸問題」は、近代ロシア文学の成立に大きな役割を果たした作家ニコライ・ゴーゴリ(1809-52)の創作方法を作者とテキストの関係の分析を通して明らかにし、あわせて、近代ロシア文学の歴史の中に「作家」の文体の変遷の一場面を探ろうとしたものである。

ニコライ・ゴーゴリの文学については作家の生存中から今日に至るまで、長い研究と批評の伝統があり、また20世紀初頭のロシア・フォルマリズムの登場を機に、彼の作品は方法論的な面での研究対象としてもより大きな意味を獲得するに至った。本論文はゴーゴリのテキストがもつ方法論的考察の対象としての可能性を見据えつつ、先行研究においてなされてきた指摘を構造化し理論化して、ゴーゴリの文体についての包括的理解を導き出している。

本論文は序論、結論と本論6章から構成されている。まず序論では、ドイツ・ロマン主義の「反省」の概念、ベンヤミンの「反省」をめぐる考察、メニングハウスの議論等に手がかりを得て、本論文での「反省」を<自己への同一化>と<他者との関係を反映させた自己への回帰>の間に生じる運動と定義している。本論第1章では、ゴーゴリに先行する時代の知のシステムが、作家の文章と描写される対象が一致する18世紀的絵画の装置として捉えられ、第2章では、この絵画の装置が崩壊した後の19世紀、ゴーゴリの時代には、外部の対象ではなく自身の内に存在するものを指示する「身振り記号」が台頭したことが指摘される。第3章では上記2つの時代の対比を通して、その歴史的背景が明らかにされている。本論後半では作品集『ミルゴロド』、『友人たちとの文通からの抜粋箇所』、『死せる魂』等、ゴーゴリ作品の具体的な考察がなされている。第4章ではテキストに登場する諸記号の機能と相互関係が分析され、第5章では前章で明らかになった「反省」の構造に依拠して『友人たちとの文通からの抜粋箇所』が論じられる。それまでの考察の結果を踏まえた第6章では、ゴーゴリの作品が時系列に即して取り上げられ、この作家の手法が確立するプロセスが追跡されている。以上の考察を踏まえて、ゴーゴリの文体は<自己同一>と<他者との関係を反映させた自己への回帰>の間の揺れとして生まれたものであることが結論されている。

本論文はゴーゴリの文体を18世紀のロシア古典主義から19世紀前半のロマン主義への表現システムの変遷の中に位置づけ、「作家」とテキストの関わりの変化を明らかにしようとした意欲的な仕事である。方法論を扱う場面では表現の未熟が認められ、用語の使用にもさらなる厳密さが要求されるものの、この不足は本質的な欠点を意味するものではなく、本論文の意義を損なうものでもないと考えられる。

以上のような評価に基づき、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(文学)の学位に充分値するものであるとの結論に至った。